認識動詞構文は小節だ

加　藤　鉱　三

1　序

英語の(1)のような文は(2)と同様にかぎ括弧部分に主述関係が見られるところから，(2)が不定詞節であるのと同様に節の地位が与えられていると考えるのが普通である。その節は，節ではあるが時制辞を欠いているため小節と呼ばれている。

(1)　a. I found [him stupid].
　　 b. I believe [him honest].
(2)　a. I found [him to be stupid].
　　 b. I believe [him to be honest].

(1)はともかく(2)ではhimが意味の上だけでなく不定詞の統語上の主語であることには異論はない。そのことは次のようなデータで確かめることができる。(3)に示したように，存在構文のthereは主語位置にしか現れないことが知られているが，(4)のようにその主語位置にしか現れないthereがこの位置に現れるからである。

(4)　There are certain problems in every institution.
(5)　I believe [there to be certain problems in every institution].

このように，(2)のhimは統語上の主語である。しかし主語であるにもかかわらずhimは主格ではなく目的格で現れている。これは格形に関する限りあたかも従属節の主語が主節の目的語として「繰り上げ」られているかのように見えるため，このような構文は繰り上げ構文と呼ばれている。ただしこの構文の分析法が提案された当初(Postal (1974))はともかく，現時点では実際に従属節の主語が主節の目的語位置に移動するとは考えられていない。主語はそのままの位置で主節動詞によって目的格を与えられていると考える分析法が標準となっている。同様に，(1)の小節においても目的格は主節動詞によって付与されると考えられている。

日本語には形態的に不定詞に相当するものはないが，次のように連用形が動詞に前接して現れ，かつ上で見た英語の例のようにその連用形の主語が現れる例はある。

(5)　a. 太郎は［妻の支えをありがたく］思った。
　　 b. 太郎は［そのことを迷惑に］感じた。
(6)　a. (?)太郎（に）は［そのことが迷惑に］感じた。

b. (?)太郎（に）は［故郷が懐かしく］感じた。

(7) a. 太郎（に）は［故郷が懐かしく］感じられた。

b. 太郎には［妻の支えがありがたく］思えた。

(5)では英語の場合と同じように連用形の主語が目的格ヲで標示されている。それに対し，(6)と(7)では主語がガで標示されている。(6)は容認しない話者もいるが，(7)のように自発を表す動詞に代えれば容認性は安定することが竹沢・Whitman (1998)で報告されている。(5)から(7)の構文では，主節動詞は英語の繰り上げ構文や小節と同様に，主節の動詞は認識動詞に限られる。更に(5)では連用形の主語が主格ではなく目的格で標示され，また連用形部分が状態的な述部に限られることも英語と共通しているところから，(5)は英語の繰り上げ構文あるいは小節と平行的であるとしてそれと同じような分析が従来提案されてきた。すなわち，(5)の①かぎ括弧部分は節的であり，②ヲ格名詞句はその主語であり，③目的格は主節動詞が与える，とする分析である。

これに対し，三原(1998)ではこれらの①から③のすべてに対する代案が提案されている。本稿の目的は，この三原の代案に対し従来の分析を弁護する，というものである。

本稿の構成は次の通りである。2節で三原の代案とその根拠を紹介し，その一つ一つを批判的に検討する。まず2．1節で三原の提唱する動詞句付加詞分析を紹介する。2．2節では語順に関する三原の議論を紹介した上で，語順に関する事実は動詞句付加詞分析を支持せずむしろ小節とする分析を支持するという議論を展開する。2．3節では、認識動詞構文のヲ格名詞句の提示機能を検討する。そこでは，三原によって提出されている事実はヲ格の提示機能を仮定しなくても説明可能であるという議論になる。2．4節はヲに関する議論を見る。そこではヲは提示機能の後置詞ではなく，通常の格助詞としてのヲであることを論じる。3節はまとめと結論である。

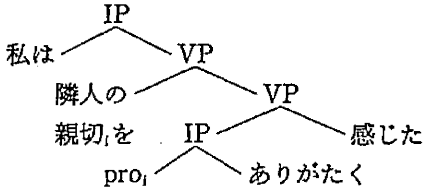
2　三原（1998）の分析とその批判的検討

2．1　動詞句付加詞分析

連用形の主語がヲ格で現れる(8)のような文に対して三原が提案する構造は(9)である。

(8) a．私は［隣人の親切を非常にありがたく］感じた。

b．ヒロシは［サチの言動を不審に］思った。（三原(1998, p.72, (30a,b))

(9)


(ibid., p.74, (35))

上で，三原は標準的な分析の特徴①から③のすべてに対して異論を唱えていると述べた。具体的には，三原の分析を最も特徴付けている要素は，(9)でヲ格を連用形の主語とはせず，主

節動詞句に付加された一種の提示句として設定している点にある。連用形の主語は，提示句を受けるゼロ代名詞proであるとされている。三原に従って，本稿では以下ではこの分析を「主節動詞句付加詞分析」と呼ぶことにする。⑽は標準的な分析とこの分析との違いをまとめたものである。

⑽

		標準分析	主節動詞句付加詞分析
①	ヲ格＋連用形	節的	構成素をなさない
②	ヲ格	主語	主節動詞句に付加された提示要素
③	ヲ格の格付与	主節動詞	目的格のヲが付与されているのではなく，後置詞のヲが格付与

以下では，三原の議論を紹介し，次いでその議論が成り立たない可能性について見て行きたい。

2．2　語順に関する議論

三原は⑿と⒀のデータをあげ，このように語順の入れ替えができないのは，ヲ格と連用形が同一節内の要素ではなく，ヲ格が連用形を含む節点よりも上にあると考えれば説明できるとしている。

⑾ a. 福沢諭吉は朝吹英二をいよいよ好ましく思ったのである。
　 b. 子供のころの私が虚無僧を奇妙に思ったのは，．．。　(ibid., p.73, (32a,b))
⑿ a. *．．．いよいよ好ましく朝吹英二を思ったのである。
　 b. *．．．奇妙に虚無僧を思ったのは．．．。　(ibid., p.73, (33a,b))
⒀ a. * 私は［非常にありがたく隣人の親切を］感じた。
　 b. * ヒロシは［不審にサチの言動を］思った。　(ibid, p.78, (44a,b))

しかし，この議論に対しては，次のような反論が可能である。

第一に，⑿と⒀の事実は，連用形構文のヲ格が提示句として連用形よりも上の方にあることを示しているのではなく，連用形に限らず述部は一般に前置できないという制約を示しているものと考えられる。というのは，この語順を取れないのは連用形述部に限ったことではなく，(14b,d)のような通常の時制節においても同様であるからである。⒁は本稿で対象としている連用形述部を持つ認識動詞構文ではなく，通常の名詞節を持つ文であることに注意されたい。三原のあげている⑿⒀は，述部一般について言える事を示しているに過ぎず，提示句がそれの連用形述部と違って主節に属している，ということを証明する証拠であるとは言い難い，ということがこのような例から言えるものと考える。

⒁ a. 福沢諭吉はいよいよ好ましい（と）朝吹英二を（と）思ったのである。
　 b. * 福沢諭吉はいよいよ好ましい（と）朝吹英二を（と）思ったのである。
　 c. 子供のころの私が虚無僧を奇妙だと思ったのは，．．．。

d. * 子供のころの私が奇妙だ（と）虚無僧を（と）思ったのは，．．。

第二に，(15)のような例が存在することは，(12)と(13)によって意図されているのとは反対に，ヲ格と連用形述部とは同節要素であることを示しているものと考えられる。

(15) a．私は家族の気使いよりも隣人の親切（の方）をありがたく感じた。
　b．ヒロシはハルの言動よりもサチの言動（の方）を不審に思った。
(16) a．私は隣人の親切を感じた。
　b．* 私は家族の気使いよりも隣人の親切（の方）を感じた。
　c．家族の気使いよりも隣人の親切（の方）がありがたい。

(16a)のように，動詞「感じる」は目的語を取ることはできるが，(16b)のように比較の対象としての「～より」句を取ることはできない[1]。一方，(16c)のように(15)で連用形になっている「ありがたい」は「～より」句を問題なく受け入れる。このことから，(15)の下線部は主節の要素ではなく従属節の要素であると考えなければならない。そうであるならば，(15)のヲ格名詞句は，三原が主張するところの，「主節動詞句に付加された提示句」ではあり得ない，ということになる。何故ならば，主節要素であるはずのヲ格が従属節要素に挟まれる語順に現れる，ということは考えられないからである。

一方，認識動詞構文を小節であるとする標準分析では，(15)の「～より」句もヲ格も従属節である小節の要素として扱うため，この語順の問題は生じてこない。

第三に，三原は認識動詞構文の述語が移動できないということを前提に論を進めている。それについて，次の例を考えて見よう。

(17) a. あなたは［隣人の親切をどの位ありがたく］感じましたか？
　b. ヒロシは［サチの言動をどのくらい不審に］思ったのでしょうか？
(18) a. How talented$_i$ to you consider [him t_i] ?
　b. How good a lawyer$_i$ did he make [his son t_i] ?　(ibid., p.67, (14))

(17)では連用形述部が疑問の焦点となっている。さて，日本語ではwh移動は統語論では起こらないが，論理形式では移動が起こるとされている。そうであるなら，(17)で連用形述部がwh句となり得ることを示すことで，三原のあげている英語の小節(18)でのwh移動と平行的であることを示すのには十分である。日本語では統語論的なwh移動はないからである。

以上，本節では，まず述部の前置ができないのは，提示句であるとするヲ格が連用形述部より上にあるからであるとする三原の議論を見た。次いで，それに対し(19)の三点によって，語順による議論は三原が示そうとしているのとは反対に，むしろヲ格と連用形述部は節的であるとする標準分析を支持するものであることを主張した。

(19) a. 述部の（三原が扱っている種類の）前置ができないのは，連用形に限らず述部一般に言える。

b. ヲ格が主節ではなく連用形述部に属すると考えなければならないことを示す例文が存在する。

c. 連用形述部はwh句であることが可能で，それは英語の小節と平行的である。

2．3　提示句の機能に関する議論

すでに見てきたように，三原は(9)の構造でヲ格名詞句が提示句であるとしている。その機能については次のように述べている。

> ヲ格名詞句は，後続するIP「proありがたく」に先立って，このIP内容が「何」について述べられているかを提示する機能を果たしていると考える。これを提示機能(presentational function)と呼ぼう。提示機能は，「〜について言えば」とパラフレーズされるもので，「隣人の親切について言えば，それ(pro)がありがたく」といった意味関係のことである。このような意味関係はaboutness関係と呼ばれることも多い。（三原(1998，p.49)）

ヲ格が提示機能を持つと考えなければならないことを示す経験的な証拠として，三原は次のものをあげている。「何かが青い」また「何かが痛い」ということを知覚する場合，それを考えて認識するということはない。三原は藤田(1981)の用語を借りて(20)の把握方式を「直感的把握」と呼んでいる。一方，「何かがうさんくさい」また「何かがつらい」ということを認識するには思考回路を経由しなければならない。三原は同様に(21)の把握方式を「思念的把握」と呼んでいる。ここで三原が注目するのは，この二つの把握方式で認識動詞構文の容認可能性に差が出ることである。

(20)　直感的把握

a. ??僕は六甲山を青く感じた。

b. ??僕は注射を痛く感じた。　(ibid.，p.78,(45))

(21)　思念的把握

a. 僕は彼の説をうさんくさく感じた。

b. 僕は別れをつらく感じた。　(ibid.，p.78,(46))

三原はこの対比が(9)の構造を仮定することにより説明できるとしている。(9)ではヲ格が提示句として機能する。そのため，この構文では，ヲ格を提示句として一旦受け止め，それに対しなにがしかの判断を下す，という認識方式が取られると三原は仮定する。そのためこの構文は認識方式が(20)のような直感的把握とは相容れないので容認性が下がる，というのが三原の議論の骨子である。更にこの議論を補強するものとして三原は(22)をあげている。そこでは「頭の中で一度転がす過程を感じさせる表現（p.79)」があるため，直感的把握から思念的把握への転化が起こっているため容認性が高まる，としている。

(22)　a. 僕は六甲山を普段より青く感じた。

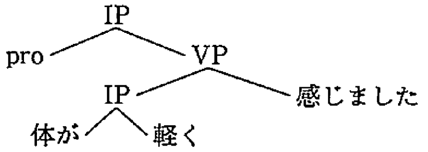
b. 僕は注射をいつもより痛く感じた。　(ibid., p.79,(47))

また三原はヲ格の提示機能を示唆する間接的証拠として(23)をあげ，彼の集めた実例の中には，提示句の後にコンマを置いている文が多いということを報告している。三原は認識動詞構文を，ヲ格を一旦提示句として掲げるものであると考えているため，彼にとっては，ヲ格の後にコンマがある文は，それが提示句として機能していることを間接的に支持する証拠になる，という議論である。

(23)　a. 村谷市議は堀内貯水池開発を，長年の支持者でも首を傾げたくなる程に安易に考えているようだ。
　　　b. ウッドストック以来のバンドのファンは今回のアルバムを，うんざりする程つまらなく感じているという。　(ibid., p.79,(48))

以下本節では今紹介した議論を検証して行きたい。そのためには，認識動詞構文でヲ格ではなくガ格が現れている文について考えておく必要がある。三原はそのような文の例として(24)をあげ，そのような文の構造として(25)を提案している。

(24)　a. 現役をやめたら，重い荷物を下ろしたようで，本当に体が軽く感じました。
　　　b. 私には父よりも空から降ってくる雪の方があたたかく感じ，母よりも木がらしの方が優しく感じる。　(ibid., p.80,(50))

(25)


(ibid., p.80,(51))

ガ格認識動詞構文の構造である(25)は，ヲ格認識動詞構文の構造(9)と違って，ガ格が連用形述部の主語として設定されている点に注目されたい。つまりガ格は提示句ではないとしているのである。

この設定は本節で紹介した三原の議論に有利にも不利にも働くことを指摘しておきたい。まず有利な点から見ておこう。三原の体系では，今見たようにヲ格は提示句であるがガ格は提示句ではない。そのため，ヲ格では容認性が落ちる直感的把握も，ガ格では容認性が落ちないはずであるということを予測する。そしてその予測は(26)に見るように正しいものである。

(20)　a. ??僕は六甲山を青く感じた。
　　　b. ??僕は注射を痛く感じた。　(ibid., p.78,(45))
(26)　a. 僕は六甲山が青く感じた。
　　　b. 僕は注射が痛く感じた。

次にヲ格とガ格の設定の違いに対し不利に働く例を見てみよう。三原は(23)のようにヲ格の後

にコンマが置かれる例は，ヲ格の提示句としての機能を示唆する傍証となると考えていることを上で見た。もしこれが正しいとすると，提示句ではないガ格の後には提示句であるとされているヲ格の後に比べてコンマを置きにくいはずである。しかし，(27)に見るように，ガ格の後にコンマを置いても何ら不都合はない[2]。

(27) a. 長年都会に住んでいる者は，故郷が，日々の仕事から不意に解放された時などには他の何にもましていとおしく感じるものだ。
　　b. 太郎は花子の親切が，何故か昨日までと違い，気を緩めると大声で叫び出したくなる程鬱陶しく感じた。

このように，コンマの置き方はヲ格が提示句であることの傍証にはならない[3]。そこで，直感的把握に関する議論も，ヲ格・ガ格が提示句であるかないかという観点とは別の角度から説明できるとすれば，我々は議論の出発点に戻ることができることになる。

田中・松本(1997,§1.5.3)は，助詞ヲの機能を「Xを動作が作用する対象として取り立てよ」というものであると結論付けている。そこで述べられているように，「公園を散歩する」では公園を散歩する対象として取り立てることができるが，「?公園を遊ぶ」では公園を遊ぶ対象として取り立てることはできない。この観点から，もう一度関係する例文を観察してみよう。

(20) a. ??僕は六甲山を青く感じた。
　　b. ??僕は注射を痛く感じた。　(ibid., p.78,(45))
(21) a. 僕は彼の説をうさんくさく感じた。
　　b. 僕は別れをつらく感じた。　(ibid., p.78,(46))
(26) a. 僕は六甲山が青く感じた。
　　b. 僕は注射が痛く感じた。

(20)の状況は，三原が言うように直感的把握であることは間違いないであろう。では，直感的把握とは何であろうか。それは受動的動作であるかどうかはともかく，主語が積極的に働きかける能動的動作でないことは間違いないところであろう。つまり，直感的把握では，動作が作用する対象を取り上げるという機能を持つヲは，その機能ゆえに起こることができない，と考えることはそれほど的をはずしていないように筆者には思われる。一方，よく知られているように，ガ格は状態述語と相性がいい。それはガの機能が動作に関わるという要求を持っていないためであると考えられる。もしそうならガ格は動作的でない直感的把握と何の問題もなく共起できる，という説明が可能となる。このガとヲの対比は，「星が見える」に対して「星を見る」であるように，今問題としている認識動詞構文に限らず一般的に言えることである。それならば，(20)と(26)の対比を提示句であるかどうかに求める前に，ガとヲの機能による説明を求めるべきであるように筆者には思われる。

三原が提示句の機能に関わる議論として提出しているのはすぐ後で紹介するヲの脱落に関す

るものと，今見た直感的把握と思念的把握の対比に関する議論である。前者は次節で否定的に検討する予定である。また後者はすぐ上でやはり否定的に検討した。さて，この二つの議論は，提示句の機能に直接関わる議論ではない。しかしヲ格が提示機能を持つことを直接的に示す議論を三原はしていないし，筆者にもそのようなものは思い浮かばない。よって，ヲ格が提示機能を持つかどうかは，文の意味を考えるしかない。

仮にこの構文のヲ格に提示機能またはそれに類するものがあるとしたら，それは認識動詞構文を小節であるとする標準分析ではどのように扱えばよいであろうか。標準分析では，ヲ格を小節の主語であると位置付けている。主語と述部との関係は典型的には主語「について」述部が述べる，というものである。とすれば，標準分析では取り立てて何も言わなくても自動的にヲ格と連用形述部はaboutness関係にあると記述していることになる。

一方，三原の動詞句付加詞分析では，ヲ格自体は連用形述部と直接には主述関係に立っていない。そのため，ヲ格と述部の関係を改めて述べなければならないという必要が生じてくるように思われる。繰り返しになるが，標準分析ではそれは無用である。

以上で，本節では次の主張をした。

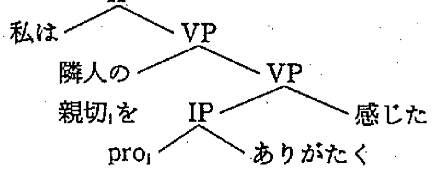
(27) a. 直感的把握と思念的把握の対比は，ヲ格の提示機能を持ち出さなくても，助詞ヲの機能によって説明可能である。

b. ヲ格が連用形述部に対しaboutness関係を持つことは，それを主語であるとする標準分析でも当然の帰結である。

c. ヲ格の後のコンマは，提示機能を持たないはずのガ格の後にも同じように可能であるため，ヲ格の提示機能の傍証とはならない。

2．4　提示句の格に関する議論

(9)のようにヲ格を提示句として設定すると，その格付与の仕方が問題になってくる。三原はヲ格が動詞句付加詞位置にあるため，それに主節動詞「感じた」が格付与することはできないと指摘している。

(9)


(ibid., p.74, (35))

そこで動詞句付加詞分析では，ヲ格のヲをどのように説明するかが問題になってくる。三原は，このヲは格助詞のヲではなく，提示機能を持たせるヲであるとしている。もしそれが正しいとしたら，そのヲは多重主語構文のガと同様の振る舞いを見せることが予想される。多重主語構文のガが提示機能を持つことはおそらく間違いないところであるからである。そこで，三原は格助詞脱落に関する事実に注目する。三原の議論は次のようなものである。(28)に見るように，多重主語構文で提示機能を持つ方の最初のガは格助詞脱落を許さない。

(28) a. 象｛が／* φ｝鼻が長いよ。
b. 田中さん｛が／* φ｝，奥さんが家出した。 (ibid., p.77,(42))

そうであれば，ヲ格も同じように格助詞脱落を許さないはずである。それを示すために三原があげているのが(29)である。

(29) a. 私は隣人の親切｛を／* φ｝非常にありがたく感じた。
b. ヒロシはサチの言動｛を／* φ｝不審に思った。 (ibid., p.77(40))

(29)でヲの脱落が許されないこと自体は疑う余地はない。そこで，三原にとっては(29)はヲとガの平行性を示す証拠となる。動詞句付加詞分析では，本節の冒頭で見たようにヲ格名詞句のヲを通常の格助詞として扱うことはできない。ところで，三原は多重主語構文の最初のガを，格助詞ではなく提示機能の後置詞であると考えている。このガが格助詞脱落を許さないのは，格助詞ではなく後置詞であるからである，という議論である。後置詞であるカラやデは省略できないことに注意されたい。そのガとこのヲは平行的なのであるから，ヲは格助詞ではなく提示機能の後置詞であり，それ故格助詞脱落を許さず，また動詞からの格付与は必要ない，という結論になる。

この三原の議論に対して標準分析の立場から反論するためには，(29)で格助詞脱落が許されない理由を他に求め，かつ適切な環境では認識動詞構文のヲ格名詞句でもヲが脱落することを示せばよい。(30)は三原が通常の格助詞脱落の例として示しているものである。

(30) a. 太郎ちゃん｛が／φ｝お菓子｛を／φ｝食べちゃった。
b. 花子｛が／φ｝コンピューター｛を／φ｝買ったらしいぞ。 (ibid., p.76,(38))

よく知られているように，格助詞脱落は文体が関係する。そこで(30)の文体を口語体からより文語的なものに変えて，その点を確かめてみよう。

(31) a. 山田さん｛が／* φ｝お菓子｛を／* φ｝お食べになった。
b. 花子｛が／* φ｝コンピューター｛を／* φ｝購入した。

このことから，(29)でヲの脱落が許されないのは，それが提示機能の後置詞であるからという可能性の他に，「ありがたく」や「不審に」という連用形を用いた言い方が文語的であるから，口語的な格助詞脱落と相容れないのである，という可能性があることが分かる。

(29) a. 私は隣人の親切｛を／* φ｝非常に<u>ありがたく</u>感じた。
b. ヒロシはサチの言動｛を／* φ｝<u>不審に</u>思った。

このどちらの可能性が正しいかは，(29)の連用形表現でも自然であるという点では文語的であるが，格助詞脱落を許すという点では口語的であるという，一見矛盾する要求を満たす環境

を作ってやればよい。筆者は，書簡体がそれを満たす珍しい文体であると主張したい。

(32) このたび全ての国立大学 {?は／が／，} 一斉に独立行政法人となる見通しとなりましたることまことに喜ばしく，もって飛躍の好機と捉えるべきであると考えております。貴学部におかれましても，各種委員会等の機関で，充分なるさまざまな方策 {?は／を／，} 既にお考えのことと拝察いたしております。

格助詞がない場合，それが問題にしたい格助詞ではなくハが脱落した可能性があるのでは充分な議論にならない。そのため，(32)ではそれぞれガとヲが脱落している個所では，ハが認められないような環境にしてあるつもりである[4]。それはハの脱落の可能性を排除するためである。

この書簡体で認識動詞構文のヲが脱落すればヲは間違いなく格助詞であり，一方脱落しなければ三原の言うように提示機能の後置詞である，ということになる。(33)を考察されたい。

(33) a. あれからはや10年が経ちましたが，あの時の貴方様のご親切 {?は／を／，} ありがたく感じていない者など私どもの中には一人とて居るはずもございません。
b. その出来事が起こって以来，私，社長の言動 {?は／を／，} ますます不審に思うようになったのでございます。

このように，書簡体という特殊な文体ではヲの脱落は起こりえるのであるから，ヲは三原が主張するような提示機能の後置詞ではなく，普通の格助詞であるということになる。また，書簡体を持ち出すまでもなく，次のようなぞんざいな言い方では認識動詞構文でヲの省略も不可能ではないように思われる。

(34) a. それほどよくしてもらっといて，お前はおれの親切 {?は／を／ϕ} ありがたく感じちゃあいないと言うんだな。
b. じゃああんたは，おれの言うこと {?は／を／ϕ} うさんくさく思っていたわけだ。

以上、本節では次の主張をした。

(35) a. ヲの脱落がこの構文で難しいのは，それが後置詞であるからではなく，この構文が連用形述部という口語的でない形式を持つという理由による。
b. この構文でも文体的環境さえ整えばヲの脱落は可能である。
c. 脱落が起こるからにはヲは後置詞ではなく格助詞である。

3．まとめと結論

以上，本稿で論じた点をまとめとしてここでもう一度見てみよう。

(10)は本稿で検討した認識動詞構文に対する二つのアプローチである。

(10)

		標準分析	主節動詞句付加詞分析
①	ヲ格＋連用形	節的	構成素をなさない
②	ヲ格	主語	主節動詞句に付加された提示要素
③	ヲ格の格付与	主節動詞	目的格のヲが付与されているのではなく，後置詞のヲが格付与

(19)は語順に関する議論をまとめたものである。

(19) a. 述部の（三原が扱っている種類の）前置ができないのは，連用形に限らず述部一般に言える。
b. ヲ格が主節ではなく連用形述部に属すると考えなければならないことを示す例文が存在する。
c. 連用形述部はwh句であることが可能で，それは英語の小節と平行的である。

(27)は三原がこの構文のヲ格名詞句に対して設定している提示機能に関する議論をまとめたものである。

(27) a. 直感的把握と思念的把握の対比は，ヲ格の提示機能を持ち出さなくても，助詞ヲの機能によって説明可能である。
b. ヲ格が連用形述部に対しaboutness関係を持つことは，それを主語であるとする標準分析でも当然の帰結である。
c. ヲ格の後のコンマは，提示機能を持たないはずのガ格の後にも同じように可能であるため，ヲ格の提示機能の傍証とはならない。

最後に，(35)はヲ格名詞句の格に関する議論をまとめたものである。

(35) a. ヲの脱落がこの構文で難しいのは，それが後置詞であるからではなく，この構文が連用形述部という口語的でない形式を持つという理由による。
b. この構文でも文体的環境さえ整えばヲの脱落は可能である。
c. 脱落が起こるからにはヲは後置詞ではなく格助詞である。

以上見てきたように，動詞句付加詞分析を主張するために三原が提出している議論は，いずれも充分な説得力があるとは言いがたいものであるとしなければならない。一方，小節を仮定する標準分析には特に不利となる点はなかったように思われる。よって本稿では標準分析の方が望ましいと結論する。

注

1．(16b)は，本文で取り扱っている比較文としては非文であるが，「家族の気使いではなく隣人の親切がありがたい」という意味としては非文ではない。しかしこの意味のものは本稿の考察の対象ではない。

2．ここでの論点は，ヲ格の後にコンマが置かれている例として三原があげている(23)のヲ格をガ格に換えたものを提出するのが一番説得的であるのだが，残念ながらそれは次に述べる理由によってできない。まず，認識動詞構文でガ格・ヲ格交替が見られるのは述語が「感じる」であるときだけである。しかし(23a)では「感じる」が用いられていない。第二に，竹沢・Whitman (1998,§5.8)が観察しているように，この構文で「感じる」に「ている」がつくのは，連用形の主語がヲ格で現れる場合に限られる。(23b)では「感じている」が用いられているため，ガ格に換えることは不可能である。

(23) a. 村谷市議は堀内貯水池開発を，長年の支持者でも首を傾げたくなる程に安易に考えているようだ。
b. ウッドストック以来のバンドのファンは今回のアルバムを，うんざりする程つまらなく感じているという。 (ibid., p.79,(48))

3．コンマが現れている理由は，ただその後が長いというだけのことであろう。

4．(32)から(34)で，対比のハの解釈は考えないものとする。

参考文献

竹沢幸一&John Whitman (1998),『格と語順と統語構造』，日英語比較選書9，東京：研究社出版．
田中茂範&松本曜 (1997),『空間と移動の表現』，日英語比較選書6，東京：研究社出版．
藤田保幸 (1981),「準引用」,『待兼山論叢』15, 1-16.大阪大学．
三原健一 (1998),『生成文法と比較統語論』，日英語対照による英語学演習シリーズ3，東京：くろしお出版．
Postal, P.M. (1974), On Raising: One Rule of English Grammar and its Theoretical Implications, Cambridge, Massachusetts: MIT Press.